コ　ラ　ム

2017年度教師海外研修フィリピンチーム

1 日目　7 月 30 日（日）　コラム提供　：　仙台城南高等学校　石垣　葵

いよいよフィリピン研修が始まる。この研修のために準備を重ねてきた、皆のテンションは高い。気合いを入れてフィリピンの予習をしてきたメンバーの先生が、羽田空港スタッフの方に英語で話しかけられるという事態が発生。フィリピンに行く前からすでにフィリピノ（フィリピンの方の呼び方）としてのオーラが出ていたのだろう。さすがは意識の高いフィリピンチームである。

いよいよ飛行機に搭乗し、フィリピンへ向かう。これからどんな旅が待っているのか、期待で胸がいっぱいのフィリピンチーム。いざ！フィリピンへ！

マニラの天候は曇り。飛行機を降りた途端、異国の香りと、蒸し暑さが全身を包む。目にする文字はアルファベット、周りにいる人たちは皆フィリピノ。フィリピンに来たという実感が一気に湧き上がると同時に、再度気持ちを引き締める。リュックは前に抱え、人数が多いので二人一組でバディとなり、常に存在確認をすることにする。

本研修の現地コーディネーターであり、国内事前研修でフィリピンの説明を担当してくれた JICA フィリピン事務所スタッフの原さんと再会する。フィリピンに知人がいるなんて不思議な感覚だ。ショッピングモールに連れて行ってもらい、まずは換金する。本屋さんに立ち寄り、フィリピンの教科書やポストカードなどを購入し、薬局でも虫除けクリームなどを購入する。蚊による感染症に注意喚起されていたために、現地の虫除けクリームに期待を寄せるフィリピンチーム。

その後、笑顔が素敵なスタッフのいるホテルにチェックイン。ホテルの向かいには日本語で書かれた看板のお店が並んでおり、フィリピンに来て初の食事はそのうちの一つ、ちゃんこ鍋屋へ。大盛りの鍋に驚きながらもしっかりと完食するフィリピンチーム。一日の振り返りで研修への意気込みをそれぞれ語り、皆の結束を固め、初日を終える。景色、人々、すべてが日本とは異なり、まるで夢の中へ来たような気分である。

まずは一日目、出だしは好調である。

2日目　7月31日（月）　コラム提供　：　宮城県立角田支援学校　佐藤　里絵

8：55　ホテルのロビーに集合し、バスに乗り込んだ。昨日から、人数確認は決められたバディごとに行うことになったので､互いに周囲を見て近くにいることを確認した。

【 JICA フィリピン事務所　】

渋滞にも遭わず､スムーズに JICA フィリピン事務所に到着した｡ビルに入るためにリュックの中身を警備員に見せ、さらにエレベーターに乗る前にも、空港並みのセキュリティーチェックが行われた。フィリピンの英雄、ホセ・リサールの銅像に迎えられ、40 階の事務所へと向かった。しばし、高層階からの眺めを堪能したり、飾られてあったフィリピンの伝統工芸品を見たり、フェアトレードの商品を手に取ったり、ロゴの前で記念撮影をしたりと各の時間を過ごす。

その後、会議室に案内され、自己紹介と意気込みを発表した。伊藤所長、狩野次長を始め、JICA フィリピン事務所の原さん、同事務所の浅田さん、総務の團さん、益子さん、佐藤さん、ナショナルスタッフの Raquel さん、Dawn さんの蒼々たるメンバーに見つめられ、皆少し緊張した。狩野次長から JICA フィリピン事務所の事業の概要説明を受け、その後我々からの質問に答えて頂いた｡｢戦後の賠償｣という形から｢国際協力｣へと変わり、この二国間の関係が｢和解のモデル｣と言われているという話を聞き、日本とフィリピン、または日本とアメリカのような関係が世界的に増えるといいなぁと思った。政治や経済、教育などの分野で歩み寄って協力した方が、お互いのため、あるいはお互いの国の子どもたちのためになるのではないか、と最初から深く考えさせられた。

【　昼食　】

昼食はフードコートで各自好きな物を注文して食べた。日本の思い浮かぶフードコートの2倍以上はありそうな広さに、店舗も飲食するテーブル席も数え切れないくらいあって、人もごった返していた。（この時はすぐに気付かなかったが、定職を持ち収入がある人だけが、ここで食べられるということに後で気付くことになる…）

【　アジア開発銀行（ADB）　】

昼食を挟んで、アジア開発銀行を訪問した。当初、教育事情について詳しいリネットさんが話してくれる予定だったが急病のため欠席し、急遽チョンビレワンさんがフィリピンの置かれている現状や課題について話してくれることになった。通訳の澤田さんが、難しい専門用語をときにかみ砕いて優しい言葉で説明してくれたので、最後まできちんとメモをとることができた。主に次の①フィリピンのマクロ経済の全体像②フィリピンが抱えている開発の問題点③アジア開発銀行がフィリピンにどんな支援を行っているかという 3 つの観点でお話があった。

① フィリピンのマクロ経済の全体像

・経済成長は、過去 5 年で増加傾向

・人口構成比→22 歳平均（若い）

・内需で支えられている

・若い年齢層が元気で購買力がある　　など

② フィリピンが抱えている開発の問題点

・不平等

・経済の 4 分の 3 がルソン島内で

・ビサヤ諸島、ミンダナオ島で貧困率が進んでいる　　など

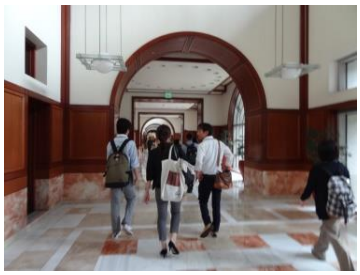
③ アジア開発銀行（ADB）がフィリピンにどんな支援を行っているか

・国民にアンケートをとり、10－POINT を作成した

・K to12 の実施

・ADB、世界銀行、IMF、JICA→これからも協力してやっていく　　など

説明の後の質問のコーナーでは、私たちの溢れる疑問にとても丁寧に答えて頂き、予定の時間を大幅に超過してしまった。また、素敵な「お・も・て・な・し」もあり充実した時間を過ごすことができた。



3 日目　8 月 1 日（火）　　コラム提供者　：　宮城県名取市立みどり台中学校　畑中麻衣子

【　アイキャン事業地　ドロップインセンター　】

今日は 8：30 にホテルを出発して、マニラ市にあるアイキャン事業地のドロップインセンターへ向かった。アイキャンとは、名古屋に本部がある日本の認定 NPO 法人で、フィリピンでは主に路上の子どもたちの支援やゴミ山で働く人たちの支援を行っている。

アイキャンスタッフの羽根さんの案内で、バスを降りて、まずブルメントリット駅近くの線路へと歩いて向かった。超高層ビルが立ち並ぶ昨日までのフィリピンとは違い、スラム感漂う町の様子に、一気に緊張感が高まった。線路が見えてくると、そこには、野ざらしの木の板のみのベッドに寝ている親子や、シンナーを吸っている少年、そこを無邪気に走り回る子どもたちがいた。彼らはこの線路沿いで暮らしているのだ。こんな生活があるのか、これが人の生き方なのか、と衝撃を受けた。

その後ドロップインセンターに到着し、路上の子どもたちの実情や彼らに対する支援活動について、フィリピン人

ソーシャルワーカーのマヤさんに話をしてもらった。このドロップインセンターでは、路上で生活している子どもたちを保護し、食事やシャワーの提供、読み書き、計算、道徳教育などを実施している。私たちはアイビーさんという13歳の女の子にインタビューをした。アイビーさんは、自分で学費や学校までの交通費を稼ぐために路上で働いている。この日はフィリピンの伝統衣装を着なければならない学校行事があり、衣装が買えないアイビーさんは学校を休んだのだという。彼女は6人兄弟の長女で、2人の弟もこのドロップインセンターに通っている。アイビーさんとお話をした後、集まっていた子どもたちとダンスやお絵描きをした。私たちが行くと、みんな、’Please sit here!’と自分のとなりに座るように求めてくれた。すぐに手を繋ぎ、寄り添ってくるかわいい子たち。ほんの少しの時間でも彼らと触れ合い、一人一人の個性を垣間見ることができてうれしかった。

【　Kalye Cafe　】

この日の昼食は「カリエカフェ」という、フィリピン大学の中にあるカフェへ行った。このカフェは、路上の子どもたちの自立を支援するために2016年にマニラ市内のティーチャーズ・ヴィレッジという地域でオープンし、その年の11月にフィリピン大学内に移転したのだという。ここでは20代の元路上の子どもたち4人が働いていた。彼らにはそれぞれ夢や目標があり、それを叶えるためにも、ここでアイキャンの支援を受けながら働いている。このカフェの目的は、路上の子どもについて知ってもらうことと、働く彼らの収入を上げていくことにある。ここで働いている子たちは「路上新聞」を作成したり、今の路上の子どもたちに対して、路上生活での危険回避の仕方や衛生、道徳について教育したりしているという。4人が作ってくれたパスタやパンは、彼らの夢がたくさん詰まった希望の味がした。

【　子どもの家　】

夕方には、アイキャンが運営している「子どもの家」に到着。ここは、ドロップインセンターのような一時保護では十分ではない子どもたちを、24時間体制で保護している。私たちが出会った8歳から16歳の男の子6人も、親から育児放棄されたり、身寄りがなく孤児になってしまったりして、この家で生活していた。自己紹介の後、赤塚先生プレゼンツの「ものづくりワークショップ」が行われたた。アルソミトラという植物の形を元にしたグライダーを紙で作って飛ばしたり、好きな絵や文字を彫ってはんこを作ったりと、子どもたちはとっても楽しそうに取り組んでいた。みんなきらきらとした笑顔をしていた。思春期特有のシャイな様子は、日本の子どもたちと変わらないと感じた。そして子どもたちと同じくらい私たち大人も真剣になっていた。子どもたちと一緒に遊ぶ楽しさを再認識する一幕となった。

夕食は、ドロップインセンターの寮母さんたちがごちそうを用意してくれた。テーブルにバナナの葉を広げ、その上にごはんと焼き魚、野菜の煮物が大量にのっている。それらのごちそうを、子どもたちはとても器用に手を使って食べているので、私たちも教えてもらいながら手を使って食べてみた。食べ物の触感が直に伝わってきて、「私たちは命を頂くことで生かされているのだ」と実感することができた。

夜は、フィリピンのホテルでも練習した、リコーダーの演奏を披露した。曲は「ふるさと」と「カノン」。そして、即席で「きらきら星」をみんなで歌った。子どもたちはなぜか、中西先生が必死に演奏している様子にはまって大爆笑していたが、とても喜んでもらえ、演奏会は大成功だった。その後は、みんな自由に遊び始め、子どもたちは大はしゃぎ。小林団長を中心に筋トレ大会が始まったかと思えば、小林団長が日本から持参していた絵本を子どもたちが寝る前に読み聞かせをしていた。静かに聞き入る子どもたちと、英語で読み聞かせる小林団長の優しい声。さっきまでのはしゃぎっぷりとのギャップに、人には様々な一面があると面白さを感じた。

さて、子どもたちが寝静まった後、私たちは順番に水浴びをしてお風呂を済ませた。シャワーが出ないため、大きなバケツに入っている水を桶ですくって体にかけた。限られた水をみんなで分け合って使う。水がとても貴重なものだということを実感した。その後、アイキャンスタッフの羽根さんにインタビューし就寝。大量のハエが飛んでいた

部屋の中も、佐藤先生持参の蚊取り線香や、南澤先生の強力虫よけスプレーのおかげで快適になり、ぐっすり眠ることができた。

今日こうして出会い、ともに楽しい時間を過ごした子どもたちの人生が、この先ずっと幸せであってほしいと願った。

4日目　8月2日（水）　　コラム提供　：　仙台市立中山小学校　浅野　隆二郎

「アイキャン子どもの家」で朝を迎える。子どもたちは学校のため、朝早くから登校の準備をする。時間にして 7 時。6 人全員がトライシクルと呼ばれる三輪バイクに乗せられて、我々に別れを告げて行ってしまった。7 時 30 分より、朝食。食べ物には多くのハエがたかっていたが、もう前日からハエの多さに慣れてしまっているので、特に気にもせず手で上手く振り払いながら食事をした。8 時 30 分からは、お世話になった「子どもの家」の掃除を行った。それぞれ床磨きや洗濯、皿洗いなどをしたり、外にある小屋（ハバイ クボ）を全員で運んだりと、少しでもお役に立てたらという気持ちで取り組んだ。寮母さんたちの笑顔をあとにして、我々は次の目的地へと出発した。

【　パヤタスのごみ山　】

移動中の窓の外の景色からは、今まで見てきたどのスラム街よりもはるかにすさまじい、おびただしいほどのごみが目に飛び込んできた。目的地に着いてバスから降りた瞬間、それは強烈なにおいを放って我々の鼻へも飛び込んできた。劣悪とも言える環境の下、パヤタスの地を求めて多くの人が住むように至った経緯は何かを知ることとなった。

初めに、住民組織の代表であるビーナさんからごみ山について解説をしていただいた。「約束の地」という意味があるパヤタスには、スカベンジャー（ごみ山で生計を立てている人）が多くいる。プラスチックや針金を探してジャンクショップに持っていき、そこで換金して収入を得ている。子どもでさえもごみ山に登り、朝から晩まで仕事をしている。教育を受けている人は少ない。危険かつ課題の多いごみ山を、フィリピン環境省は閉鎖することにしたが、この地で生活しているビーナさんを始めとする多くの人は悲しい気持ちになったという。この話を聞きながら、環境・安全のためには閉鎖しなければならない言い分と、働く場所が奪われて生活ができなくなるために閉鎖されては困るという言い分の、相反する 2 つの事実についてどちらがいいのかを、参加者がそれぞれ考えさせられたような気がした。

その後、2 グループに分かれて現地の家庭訪問へと向かった。歩く道は舗装されておらず、途中雨が降ると道路に川ができる状況。さらには、明らかに狂犬病と思われる歩き方のおかしな野良犬がいたり、道の至る所に糞が転がっていたりと、一人一人が気を引き締めて歩いていた。どちらの家庭も決して広いとは言えない、むしろ狭すぎると言っても過言ではない場所に多くの家族が暮らしていた。毎日がぎりぎりの生活で常に大変な思いをしているとのことだが、どちらも「家族と一緒にいられるから幸せ」「ごみ山が無くなってもらっては困る」という願いの共通点があった。生きるための切実な思いがダイレクトに伝わってきた。

昼食は、フィリピン料理のシニガンスープ（フィリピンを代表する料理で肉や野菜が入った酸味のあるスープ）。ここに来るまで何度か口にしており、独特な酸っぱさが癖になりつつあったが、今回の味は我々日本人に合わせてくれたらしく、本当に美味しくいただくことができた。ごみ山に囲まれながら建物の屋上で食べたあの味は、今でも忘れられない。

午後はフェアトレード団体（SPNP）による説明があった。「収入向上のために頑張るパヤタスのお母さん」という意味がある団体に参加しているお母さんたちが協力して、財布やブレスレット、キーホルダーなどのハンドメイドを売っていた。陽気なビビアンおばさんは、以前はごみ山で仕事をしていたが今はテディベアを作って生計を立てている。そんなビビアンさんが「もう私はスカベンジャーではないけれど、ごみ山はごみ山として存在してほしい」「無くなったら困る人がいるから」と言っていたのが印象的だった。フィリピンの人の優しさに触れたワンシーンであった。

5日目　8月3日（木）　　コラム提供　：　山形市立山寺中学校　山口　俊一

【　タナワン市役所、タナワン第2小学校　】

（1）台風ヨランダからの迅速な復興をとげたリーダーシップ。

大きな災害に遭遇した時に、もし、自分がその街のリーダーだったら、復興までの道のりを思い描くことができただろうか。

答えは、すぐには出てこない。まず、考えられるのは、困惑する姿である。

しかし、タナワン市長のペルテクソン氏は違った。

大災害直後から明確なビジョンを持ち、リーダーシップを発揮した。

タナワンの地元紙でも「タナワン市長、ペルテクソンが回復へのロードマップを描く」と題してそのビジョンが報じられている。

彼の明確なビジョンは、先行き不透明なこれからの時代、子どもたちの前に立ってリーダーシップを発揮すべき、私たち教師にも大きな示唆を与えてくれる。

アメリカに本社を置く「P&G」のアジア担当副社長を務めた経験を生かし、「自分の生まれ故郷、フィリピンの発展に貢献したい」との思いから、地元で活動をはじめ、やがて市長に当選する。その４ヶ月後に、台風ヨランダに遭遇することとなる。

しかし、彼は、全く動じなかった。

「家庭では、父の役目は、子どもたちを守ること。私は、この街の父だと思っていた。」

と話す通り、災害の直後から、人並みはずれたリーダーシップを発揮する。

しかし、彼が語るに、こうしたビジョンは P&G 時代の企業理念「お客様の暮らしを、毎日少しずつであっても、より有意義なものにしていこう」を日々考え続けてきた結果だという。彼が今なお貫く「人のため働き、共に手を携えて前に進む」という考えは、P&G 時代の「お客様に信頼いただける品質の高い製品で、市場をリードするため、世界中のお客様に長く愛され続けるために、良き企業市民として『正しいことを行う』姿勢が不可欠。事業の透明性を保ち、社外の人々との協力関係を深め、人材を尊重し、社会的にも環境面でも責任ある活動を行う」という信念に基づいている。

彼は、真っ先に、必要な支援を取り付けるために、バイクでタクロバン空港に向かい、必要な支援を取り付けた。次に、関係するリーダー達とミーティングを行い、自分とは違う意見を積極的に聞き入れ、優先事項の確認を行っている。

その中で市民の 10 分の 1 に相当する 3000 人がボランティアで復興に関わる仕組みを創り上げることに成功する。

最初に着手したのが、長年課題だった「バラック小屋（トイレもない葉っぱの家）」で生活していた人に仮設住宅を提供したことである。海岸から 50m は居住禁止になっていたにもかかわらず、低所得であるが故に、その貧困状況

から抜け出せないでいた住民を、この危機を乗り越える支援とともに「810 家族」全員を救済したのである。その後の生活でも、政府の家に間借りしている状態なので、水と電気の支払だけですむようにした。

まさに、市民という大家族を巻き込んだ大復興劇の幕開けとなった。

自分たちの生活を救ってもらった人々は、協力しないはずはない。復興への人々の熱はますます加速する。また、その姿を見た他の市民も復興に熱を上げていくこととなる。

そして、道路や下水道といったインフラ整備、村レベルでのレスキュー隊の養成と、次々に復興を遂げていく。常に、専門チームと優先事項をきめるミーティングを行っていたので、住民が「復興」を「自分事」として捉え、市長をリーダーにして「私たち」という主体者意識を持った復興が行われたのである。

(2) 小学校で聞いた「あなたのまちの魅力は何ですか」の質問に大人達の姿が。

私の勤務地は、松尾芭蕉が「閑かさや岩にしみいる蝉の声」という有名な俳句を詠んだ名勝・山寺にある。だから、小学校に訪問した際に、児童会長の女の子に質問した。

「あなたの街の魅力は何ですか。」

その時に、隣にいた女の子は、地元の景色がきれいなところを教えてくれた。当然、私もそうした応えを期待していた。ところが、驚きの声を聞くこととなる。

「街の復興のために、一生懸命に働く大人達の姿です。」

（これは、翌日に訪問した学校での出来事であるが、ペルテクソン氏の努力の賜物であろう。）

(3) 教師の情熱と子どもたちの学ぶ意欲に大きなパワーをもらう。

いま、私たちの授業に「本気」の姿はあるか？

学校では中堅として働く年代となり、授業や学級経営以外にも担うべき仕事が年々増えている。そんな状況で、どこか「子どもと本気で向き合えていない自分」を感じることがあった。

ところが、フィリピンの先生達の情熱は違った。

子どもたちに本気で語り、本気で向き合っていた。教育技術にはまだまだ伸びしろがあり、研修の余地はあるといわれているものの、私たちは失いかけている「教育への情熱」「教師としての使命感」は考えさせられる点が多くあった。

教師と子どもたちとが、一体となって、未来に向かう姿がそこにはあった。

３０年前の日本もこうだったのだろうな、と感じる場面だった。優れた授業の在り方を求める一方で、フィリピンの若き教師達の教育にかける情熱を、日本で志を共にして、教育にあたる仲間達に伝えつつ、自分自身の中にも、その情熱を喚起したいと強く感じた訪問だった。

(4) 変わりゆく私の学級経営と指導理念

ペルテクソン氏の「市民は、私の大事な家族だ。」という信念。

小学校で聞いた「私のまちの魅力は、一生懸命な大人の姿」という子どもたちの尊敬。

小学校で見た「この子どもたちと共に未来を切り拓いていく」という教師の情熱。

日本にいては、感じ取れなかった価値観を胸に、帰国した。その 1 ヶ月後に行われた運動会。初心に戻って、自分の中学時代の感動を呼び起こし、子どもたちと本気になって創り上げた運動会となった。子どもたちも大粒の涙を流し、達成感を味わっていたが、私もまた教師として子どもたちと向き合えることへの喜びを感じ、大粒の涙を流させてもらった。自分が変わって成長した分、目の前の子どもたちも成長していく。そんなことを学んだ海外研修だった。

6日目　8月4日（金）　　コラム提供　：　本宮市立五百川小学校　小林　真一

【　パロ第一中央小学校　】

まずは、青年海外協力隊の新井隊員の待つパロ第一中央小学校（内の特別支援センター）に到着。どのような生徒が待つのだろうと少々不安もあったが、来校してみれば生徒のみなさんも職員のみなさんもフィリピンスマイルのあふれる明るい雰囲気の学校、生徒に胸をなでおろす。世界は笑顔でつながれる。

校長先生から熱い学校説明（フィリピンの方々はどんな時も雄弁であり、熱弁する）を受けた。その後は、一緒におやつ作りを楽しむ。パンシットやルンピア（料理名）といったおやつを作った。作っている傍からこれは何人分の量を作っているのだろうとこれまでのフィリピン生活からふとよぎった予感が的中。できあがったおやつの量で昼食はキャンセルすることになった。春巻きに具を巻く人、鳥のレバーを切り刻む人、麺を砕く人など障害をもつ子供たちとともに楽しく活動に取り組んだ。その中で佐藤里絵先生は、準備してきた自分の学校（宮城県立角田支援学校）の様子を熱心に伝えていた。私はそこで助手という立場で働いているコピという少年に、東日本大震災および原発事故当時の様子について話した。彼は日本にとても興味があるらしく、私の話に食いついてきた。片言の英語ではあったが当時の様子や心情は詳細に伝わったことが、いつもにこやかな表情をしている彼が次第に真剣な、こわばった表情に変容していく様子から見て取ることができた。

また、ある程度調理を終えたところで学校に隣接する市場通りを見学に行こうということになった。私は「洗い物マスター」と呼ばれ、いい気になっていたため市場へは行かず、そのまま支援学校の教室に残り、寡黙な少女と洗い物に勤しんだ。後ろではJICAの團さんが糖尿病の発作で休んでいた男の子のノートに書かれた宿題（らしきもの）をやさしく聞いていた。フィリピンを訪れて初めてゆっくりした時間を感じたことと十年以上も前の子育てしていた時の幸せな時間の回想とが重なり、それを詩にして残した。

「幸せはいつもここにある」
あなたがうしろで子どもの宿題を微笑みながら聞いていて
わたしは子どもと洗い物。
その子はうんうんとうなずくだけだったけれど
わたしの洗ったお皿をおだやかに運んでいる。
窓の外には緑が見えて
そこからはさわやかな風が吹いてくる。
フィリピンでふっと感じた非日常の中の日常
なぜか懐かしくて
少しほっとする時間
幸せを感じる時間でした。

みんなで作った料理は、文句なくおいしくてたくさんいただいた。それでも食べきれなかったが。また、ここでは「チョコラテ・チョコ・チョコ」ダンスも忘れてはいけない。私たちには、だれが歌っている曲でオリジナルがどのようなダンスなのかは分からないが、身長の高いアンジェロ君が教えてくれたダンスを何度となく繰り返し踊ったことも良い思い出である。

【　タクロバン観光「サン・ファニーコ橋」　】

その後、日本の援助で作られた「サン・ファニーコ橋」に向かった。その見学方法が特別だった。その橋の上では、駐車、停車は禁止ということで「車をぱっと停めますので、ぱっと降りてください。運転手が橋の向こうまでいったらぱっとUターンしてきます。そしたら、また車をぱっと停めますので、ぱっと乗ってください」ということであった。「ずいぶんぱっとやらなくてはならないのだな」と思った。しかし、そこでぱっと行かないのがフィリピン。ぱっとUターンしてくるはずの車が一向に来ない。原さんが運転手に連絡したところ「今出たところです！」とのこと。

蕎麦屋の出前か！でも、長居できた分、通訳の佐藤千咲さんから橋から見える景色についていろいろなことを教えていただいた。この辺は、例え、高山でも頂上付近までヤシの木が生えていること。浮かんでいる島には、プライベートビーチ風になっていてちょっとしたリゾート地になっていること。台風ヨランダの時には、ヤシの木の葉がすべて落ちて山にマッチ棒が立っているような状態であったことなど。

【　フィリピン教育省レイテ州事務所訪問　】

台風ヨランダからの教育面での復興についての講話をいただく。ここでお話いただいた方も雄弁であり、熱弁されていた。

「Bangon DepED Task Force」（立ち上がれ！）

という力強い言葉から始まり、バヤニハン（相互支援の精神）を第一に復興教育の柱としてきたとのことであった。ハード面の復旧に努めてきたことはもちろんのこと、特に精神面や心のケア（サイコロジカルサポート）にも力を入れているという点が特に強調されていた。ユニセフや JICA、NGO 団体には大変感謝しているとのことであった。具体的な施策としては、各学校のカリキュラムに四半期に一度の避難訓練、及び「マペ（=MAPEH)」と呼ばれる音楽(Music)、芸術(Arts)、体育(P.E)、保健(Health)などを総合的に行う情操教育教科の中で防災教育を実施するようしているとのことであった。

7 日目　8 月 5 日（日）　　コラム提供者　：　三春町立岩江中学校　湯田　しおり

【　いしのまき NPO センター事業所訪問　】

いしのまきNPOセンターがJICAの草の根技術協力事業で支援をしている水産加工施設を訪問した。ミルクフィッシュという魚の加工作業を行っており、魚の小骨取りの作業を体験させていただいた。とても細かい作業で、骨が折れる仕事だ。

仕事を見学しながら、フィリピンの宗教的な問題についての話を聞いた。宗教と多産多死の現状を知り、人を救うための宗教の在り方を考えさせられた。

その後、カキ養殖をしている場所が見える海岸へ行けることとなった。ぬかるんだ藪の中を抜けて歩くと、青空の下に大きな海が広がっていた。フィリピンに来て初めての海に、どの先生も子どものようにはしゃぎ、裸足になって楽しんでいた。

【　サンタクルス村見学　】

午後は、サンタクルス村の村長さんと会い、台風ヨランダの発生時のことについて話を聞いた。村長さんは、女性でとても気さくな方だった。高波でみんな流されたこと、建物の 2 階の 1 室に 42 人が避難してきたこと、ヤシの木に 2 時間しがみついていた人のことなど当時の話を聞くと、東日本大震災と重なることが多く、苦しい気持ちになった。

その後、3 グループに分かれサンタクルス村を見学した。私たちのグループは、2 つの家庭を巡り、話を聞いた。泳いで遠くに逃げ、建物にしがみついていたお父さんの話、ヨランダの後 1 年ほどはとても悲しく泣くことが多かったがその後立ち上がったお母さんの話、ヨランダ発生後、さまざまな情報へのアンテナが高くなったことなどたくさんの話を聞くことができた。「ハイヤン」（台風という意味）や「ホーム」（名前が思いつかなかったからという理由）という子どもの名前の付け方には衝撃を受けた。

【　トレードフェア・お土産センターで買い物　】

サンタクルス村を後にし、パロのトレードフェアとタクロバン市のおみやげセンターに行き、買い物をした。バナナマフィンやキャッサバチップス、バナナチップスなどさまざまなお土産を購入した。トレードフェアにはミラクルベリーという実があり、これを食べた後に酸っぱいものを食べると酸っぱく無くなるというミラクルな体験をした。タクロバンのお土産センターでは、探していたメンバーお揃いの T シャツを購入することができた。「I LOVE タクロバン」T シャツで、さらに団結力が深まったフィリピンチームであった。

8 日目　8 月 6 日（日）　　コラム提供者　：　平田村立小平小学校　中西　龍也

本日は、ひそかに楽しみにしていた「イントラムロス」（スペイン統治時代からの歴史を伝える建物などが残っている）の見学だ。タクロバン空港から「ミニオンクッキー」を食べつつマニラに移動。イントラムロス＝「壁の内側」という意味らしいが、イメージは「進撃の巨人」だろうか？　…などと思って到着してみると、城壁の周りがグリーン輝くゴルフ場になっている！バスが停まると、早速山口先生と赤塚先生が鳥のおもちゃを買っている！行動が早い！

マニラ大聖堂は荘厳な雰囲気でジャージで来てしまって申し訳なさを感じる。ステンドグラスがそれぞれの色を主張するかのように輝き、且つ優しいハーモニーで目の中に飛び込んでくる。さすが世界遺産。一瞬でハートを鷲掴みされ、もっと長く滞在していたいと思うほどだった。　あ、馬車が走っている！「カレッサ」だ！「乗りたい！乗りたい！」「えっ？乗るの？」「やったー！」というわけで、乗車。少し青空が見えてきた街並みをカポ、カポと心地よい速さで移動する。ホッとするこの感じ、フィリピンに来てから初めてかも。歴史を感じる街中に、大学があるかと思えば、ファーストフード店のジョリビーやコンビニのセブン・イレブンがさりげなく佇んでいる。フィリピンの中の小さな国家のようで、現代と上手く融合しているなと感じた。

本日の夕食はビュッフェスタイルでお洒落な感じのレストラン。サラダとフルーツは疲れた身体にありがたい。フィリピンチームメンバーの会話も絶好調で「お、ショーが始まった！」「ビートルズは私でも知ってるよ。」「バンブーダンスってフィリピン発祥なのかー！」「なぬ、このタイミングで赤塚先生と石垣先生がバンブーダンスに登場！？」（←何に登場されたのでしょう？）

う～ん、本当に飽きないフィリピンチームのメンバーと共に、夜は更けていくのだった…。

9日目　8月7日（月）　　コラム提供者：階上町立石鉢小学校　赤塚　徹

マニラ首都圏の学校を訪問する予定の一日。ドン・アレハンドロ・ロセス科学技術高校を目指しホテルからマイクロバスに乗り出発。前日、マニラ市内の観光など日程的にゆとりがあったこともあり、体調不良を起こしていたメンバーも回復していた。バスの車窓から外に目を向けると、マニラ市内からケソン市内の様子が目に飛び込んでくる。町を行き交う人々。たくさんの店や看板。人々の頭上に張り巡らされた大量の電線。川沿いに立ち並ぶ民家。それらの景色を話題にバスの中でも会話は弾んでいた。

【　ドン・アレハンドロ・ロセス科学技術高校　】

バスに揺られること約1時間。ドン・アレハンドロ・ロセス科学高校に到着し、バスが校門をくぐると揃いの衣装に身を包んだ生徒達が整然と並び我々を出迎えてくれた。挨拶とともに手作りの首飾りをプレゼントされ、一同にも自然と笑みがこぼれる。校舎内に入ると生徒達のダンスで歓迎され、その手厚さに少々圧倒された。

ドン・アレハンドロ・ロセス科学技術高校は首都圏唯一の技術系高校であり、現地では職業訓練校のモデル校として高い評価を受けている。1960 年にケソン市ハイスクールの姉妹校として誕生した同校は、世界の発展に取り残されないように技術をつけることを目標として掲げている。整備・運転・ホスピタリティーの学科などの学科があり、学区には貧困地域も抱えている。

歓迎のセレモニーが終わると、生徒達の案内のもと校内を一巡して見学した。各教室では、整備や木工などの実技訓練が行われており、多くの高校生が熱心に訓練に取り組んでいた。これからの更なる経済発展を支えていく子どもたちの様子にエネルギーを感じる。その後は、プレゼンテーションによる学校の概要説明が行われ、2時間近くかけて丁寧な説明を聞かせていただいた。校内にあるレストランで昼食を取った後は、研修に参加していた教員による授業交流が行われた。習字の体験授業、日本の中学生が考えた数学の問題に取り組む授業と「ゆるキャラ」を考える授業、インタビューによる交流だった。どの授業も生徒達が真剣に考え、生き生きと取り組んでいる姿が印象的だった。最後に、同校の生徒達からの質問を受ける場面が設けられ、我々の団長・副団長による質疑応答が行われた。質問の最後に小林団長から現地の高校生達に励ましのメッセージが送られ訪問は幕を閉じた。

今回の訪問では、近い将来フィリピンの社会を支えるであろう子どもたちに接することができた。将来は海外に飛び出して活躍したいと目を輝かせる若者達のエネルギッシュさに頼もしさを感じた一日であった。

10日目　8月8日（火）　　コラム提供　：　八戸市立多賀小学校　工藤　星子

なんと今日は視察最終日。長かったような短かったような研修が終わる。

朝はゆっくり9時半ロビー集合。何泊もさせてもらったマカティのホテルの朝ご飯をしっかり食べてもいつもより余裕がある。出発までの時間、各部屋で今日の JICA フィリピン事務所での研修振り返りの準備に勤しむ。

10時より少し早く JICA フィリピン事務所へ到着。8日前に初めて訪れた場所のはずなのに、なんだか懐かしく感じる不思議な感覚を味わった。そして、いよいよ研修最終振り返り。始めに、JICA 東北からの同行者である野口さんから全行程の振り返りが述べられた後、参加者一人ずつのスピーチを行った。スピーチ内容は、①研修のキーワード　②子どもたちに伝えたい・

考えさせたいこと　③授業案　④目指す教師像　この4つを柱に研修に対する熱い思いを伝え、皆で共有した。次に、研修全体に対しての振り返りを行った。前日の話し合いで出た沢山の意見を、小林団長がうまくまとめて話してくださった。最後に、大変お世話になったフィリピンJICA事務所の皆さんや同行ファシリテーターの南澤先生からお話をいただき、研修を締めくくる貴重な時間となった。

無事振り返りが終わってほっとした後は、待っていましたショッピング！お昼は各自で好きなものを食べ、時間までスーパーマーケットでお買い物。ドライマンゴーや紫芋のお菓子がみるみる陳列棚なくなり、みんなの袋はぱんぱん。二つ目のお店では、教材として使えそうなフィリピンの伝統衣装や旗、楽器などを買って、授業構想も広がる。

夕方は、社会起業を行っているユニカセ・コーポレーションを訪問し、代表者中村八千代さんのお話を聴いて衝撃を受けた。こんなにも言葉ひとつひとつに力があり、実際にそれを具現化するための努力を惜しまない方がいらっしゃるのかと。「愚直に前に」進み「自分を信じ」「努力に関しては誰にも負けない」とおっしゃる凛々しい姿に胸を打たれた。共に働く青少年のスタッフが調理してくれた有機野菜を使った栄養価の高い食事はどれも美味しく、みんな笑顔でお腹いっぱい食べることができた。心も体も満たされた活動最終日であった。

11日目　8月9日（水）　コラム提供　：　仙台城南高等学校　石垣　葵

5分前行動の私たちは5時55分にホテルロビーに集合。見送りに来てくれたJICAフィリピン事務所の原さんとお別れして、マニラ空港へ向かう。だんだん見慣れてきたフィリピンの街並みやぶつかりそうになりながらすれ違う車とクラクションの音、フィリピンの温度とにおい、いつも素敵な笑顔で私たちを迎えてくれたホテルのスタッフの方や、ドライバーさんとももうこれが最後かと思うととても名残惜しい。フィリピンの方々はいつも笑顔を絶やさずに私たちに接してくれて、慣れない土地でハードな研修をする私達には本当にありがたいものだった。

マニラ空港において、手元にあるフィリピンペソをなくすべく買い物をしたが、使い切ることができなかった先生は、再びフィリピンを訪れることを決心したのだった。マニラ空港では価格が米ドル表示されている店が多かった。そして、フィリピンペソで支払うことも可能であるだけでなく、日本円でも支払いが可能だった！ そして空港価格はすごく高い！最後のフィリピンを満喫しつつ、飛行機に乗った。

飛行機の中では、仮眠をとる先生、授業案の作成を進める先生、早速フィリピンロスになる先生がいる中、真剣に手相を見てもらう先生や、円周率の暗唱を始める先生もいた。飽きのこない、個性豊かなメンバーである。

研修を通して、疲労はMax、頭の中は、次々と入ってくる情報とまだ処理しきれていない想いであふれそうだ。体力的にも精神的にもエネルギーを消耗する毎日だったが、沢山考え、葛藤し、その中から新しい気づきを得られるような中身の濃い研修ができた。

フィリピンチームの皆と協力し、支えあい、笑いあいながら過ごした日々もかけがえのない財産となった。皆と行動を共にする中で、異なる考え方や価値観、信念などに触れることができたし、互いに刺激しあいながら授業や今後の国際協力についても、多面的な視野を広げることができた。

人は、人によって成長できるのだと改めて感じた。研修が終わってほしくないと思うのは、良い仲間に巡り合えたからだろう。皆には本当に感謝したい。

あっという間に羽田空港に到着。

空港で最後のミーティング。ファシリテーターの南澤先生、野口さん、団長に、密かに用意していた私たちからの

メッセージを渡す。ドッキリ大成功！3 人ともすごくびっくりしてくれた。限られた時間の中で、皆で準備したかいがあった！ドッキリ大好きなフィリピンチームは大喜び。家に着くまでが研修であることを再確認し、空港を後にした。

皆と別れて一人で新幹線に乗る。
今まで、朝から晩まで大勢で行動していたから、突然一人になると心細さと寂しさがこみ上げる。
　新幹線の窓からは、整然と並んだ家や建物が見える。ほっとするような、まだ少し違和感を覚えるような景色だ。日本での生活がまたスタートすれば、違和感など一瞬で消えるのだろう。私たちの普通が、また始まる。
世界には、70 億を超える人々が、様々な場所で様々な生活をしている。フィリピンで見たのは、そんな世界のほんの一部である。住む場所、生活のスタイルは違っていても、人々がそれぞれの信念を持ち、少しでも多くの人が、少しでも多くの幸せを感じて生きていけるような世界になることを願って止まない。そして、そんな世界を作るために、より一層意識を高く持とうと決心するフィリピンチームであった。